
願い事。

太@眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い事。

【Nコード】

N2741P

【作者名】

太@眼鏡

【あらすじ】

。。。。。。。。

(前書き)

誰もいなくなった放課後でのこと。

茜色に染まった校庭で、彼女は言った。

「ねえ。この石をさ、空に向かって投げるから、石が地面に落ちる前に今一番の願い事を言ってみて？　勿論、願い事は三回復唱するの」

「どうして？」

「いいからいいから。じゃあ、いくわよ」

「——ちょっと」

彼女は、僕の制止が不服だったのか苛立ちに似た感情を瞳に宿し、振り上げた腕を斜めのまま指先で小石を握り直した。

僕は慌てた。その鋭い視線から、彼女を怒らせてしまったのではないかと思ったから。

彼女はたまに不思議なことを言い出す。それは僕にすれば意味の無さそうに思えることが多い。その度に僕は首を横に振り、彼女は理解し易いとは決して言えない理屈をならべては、押し切るように僕を納得させようとする。

「なんで願い事を？　それに三回願い事を唱えるのは流れ星に向かってじゃない？」

靴の先で地面の砂に円を描いていた彼女に向かって、とりあえずの疑問を口にしてみる。それは、僕から彼女への明らかな挑発行為だと受け取られることだろう。

それを聞いた彼女は、つまらなさそうに腕を下ろすと、少し棘のある口調で僕へと詰め寄ってきた。

「君はさ、制約されたわずかな時間に魅力を感じない？ ロマンチックだと思わない？」

そろそろ始まると思っていた彼女の持論の展開。

勿論、その引き金を引いたのは僕自身だけれど、もしこれが漫画だったのなら、僕の頭の上にはいくつものハテナマークが浮かんでいて、口が半分以上も開いていることだろう。

なんとなく想像した自分の顔はあまりにも間抜けだった。

「願い事自体や、その対象にロマンチックさは感じるけど、時間って何？」

「流れ星なんていっぱい流れるじゃない。それに私なら、流星群に向かって願い事をするわ。そのほうが効率的よ。一、二秒にも満たない一瞬の間に願い事を三回も早口で言い終わらせるなんて、ほとんどの場合が無理よ」

彼女は「そうでしょ？」と言いたげな表情で僕を見遣る。

反論の余地はある。でも、僕はそれをしない。彼女は、僕の質問に答えたただけだ。彼女の価値観に干渉するつもりは始めからないのだ。

沈黙が二人の間に訪れる。

校舎へと吹き抜ける風が砂を舞い上げ攫い、迫りくる帳へと伸び

る二人の影が視線の先でゆっくりと重なっていく。

そして、彼女が再び口を開いた。

「——だからね、時間が大切な。それも制約があつてこそ。流れ星が消えるまでに、石が地面に落ちるまでに、そんな一瞬の時間に願い事することがロマンチックだと、私は思ふな」

うつむき加減でそう言った彼女は、足元の円に二本の線を足した。そして何の躊躇いもなく、その時計らしき図形を元の砂へと戻していく。

「だから、してみてよ。願い事」

「色々矛盾していない？」

彼女は、一瞬の間に願い事を唱えることを無理だと言った。しかし、制約された時間には――。

「細かいことは気にしないの。じゃあ、いくわよ」

僕の思考は咄嗟の中断を余儀なくされる。

僕の返事を待たずして、夕日を背に立ち上がった彼女が野球のピッチャーを思わせる構えで腕を大きく振りかぶっていたからだ。

「今一番の願い事を言ってね！」

小石が地面に落ちるまでの間に、おそらく僕は願い事を三回も言えない。

それもそのはずで、彼女の見よう見まねの投球ホームはひどく滑稽で、それでいて、その投げ方では上ではなく前へと小石は投げ出

されるだろうから。

彼女はゆっくりと足を踏み出し、体を少し捻りながら腕を前へと送り出す。

指先から放たれた小石は、緩やかな放物線を描いていく。

——しまった、まだ願い事を思い浮かべてすらいなかった。

「早く！」

地面へと落下していく小石と僕へと振り返った彼女の姿。

僕はそれらをスローモーションのように視界に捉えながら、なるべく早口で、それも噛まないように気をつけて、一回だけ願い事を口にした。

それは、ずっと心の底から溢れ出てきた、僕の今一番の願い事だった。

「君とずっと一緒に居られますように！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741p/>

願い事。

2010年12月10日14時35分発行